

はじめに

徳島から阿南、日和佐と海岸沿いに南下する鉄道の終点は長らく牟岐であった。出羽島はこの牟岐の沖 4 km に浮かぶマンゴウのような形をした小島である。このマンゴウの実の上部は小さなラグーンのようになっていて、牟岐からの定期船もここに到着する。100 世帯程の集落はこのラグーンの港をとり囲むような形で立地し、その大部分は砂嘴上に位置する。

室戸岬から阿南にいたる海岸線は黒潮に洗われて温暖で、暖温帯広葉樹林（照葉樹林）が支配する植生の地である。室戸岬や阿南弁天島などでは亜熱帯性植物も繁茂している。出羽島にも、アコウ、シラタマカズラ、タマシダなどが見られ、かつてはオオタニワタリ（シダ類）も存在した。島内のところどころには、ワシントンヤシ、フェニックス、ドラセナなどもあるが、これは昭和 30 年代ごろに移植されたものである。

港に着いた旅人はハマユウやハイビスカスなどが咲き、クロアゲハが舞い、アコウの気根の垂れる姿を見るとき、南国らしい風景を享受することができる。

出羽島では昔、カツオ漁が盛んであり、カツオの群れが寄る礁、室戸岬沖の「土佐^{（ま）}沓^{（せ）}」は、別名「阿波沓」といい、出羽島の漁民山村岩太郎が 1914 年に発見したものである。カツオ節の加工場はもはや無くなってしまったが、島の産業の中心をなすのはやはり漁業であり、毎朝港に陸揚げされる魚は、タイ、レンコダイ、アマダイなどの他、ガシラ、カワハギ、イトヨリなど沿岸漁業の水揚げとしては高級な釣魚が獲れていて、見事である。

静かな島内にはいつの間にか人より猫が多く住み、人々が島の往来をその朝の漁獲物を猫車に積んで運搬していく姿を横目で見送っている。誠にのんびりとした風景である。

以下に述べられる報告は、この自然豊かな小島の生活誌とでも言うべきものであり、阿南市沖の伊島との比較も試みられている。島の方々の生活と生活の場の現状がわかれば、一応の目的が達せられたといえよう。

（山野正彦）

口絵	………… (i)
はじめに	………… 山野正彦 (1)
目次	………… (2)
調査および対象地域の概要	………… 筒井一伸 (3)
離島における学校教育に関する一報告	………… 稲垣吉裕 (31)
1980年における出羽島及び牟岐町の第二次産業	………… 水内俊雄 (51)
出羽島漁業の転換—1980年調査より—	………… 水内俊雄 (58)
出羽島の女性—就労形態を中心に—	………… 佐藤里美 (63)
1980年における出羽島住民の生活行動	………… 澤端智良 (91)
アンケート調査から見た出羽島島民の買い物行動	………… 浅井和美 (108)
利用者から見た出羽島連絡船	………… 洲見啓介 (127)
伊島・出羽島両航路の利用状況とその背景	………… 岡田理樹 (140)
出羽島の生活誌	………… 坂井康広 (153)
おわりに	………… 水内俊雄 (160)